梅桜日記

ル 4
3508

梅柳日記

門ル4
號3508
卷

玉雪渡清

拙堂隱士出

いつれ
とも
何の
分へき
なつかし筆
まれ
志まひ乃
花のいろまるなり
雪

一鳳

梅桜日記

うらくと霧こそ終る雲に僧されて、そこともしらぬ
旅寐のせまほしおもう。難波のほりいもまぐひと
と勢にざるなら孫ぞ思ふどちといえんだろうれ友りなし。
いうぐいさん。かうぬぐらおるまちの日を。ひたやごりうり。
窓のうちにのこるさんも。むげのいたりも。とまいうにそのの
いそぶどりして。大槻壽信をそくのがほにいあへあけしき
りもあり孫ぞ。まづいとうれしさるいそうちまもしらぬとの

こなづら。志めやうれるおもんしゆうまで。常ことみ。おつくるに
うたれさえかしこく。おもしろうるうる者なまば。中しとり
きとびたらんをとれようにといざなへるなりそう。我さらぎの
十七日。今(ケフ)るようとちだらしかど。よべの夜に。雨のぬうたへ
うかるべしとて出さらば。つまくなるまに。猶つくと。拝
ひゆうむうたを拝りひめぐらして。文机(フツクエ)にもたれゐたりに。
河内のきう川人中西多豆伎。とひ来たり。今ハ昔。多豆(タヅ)
の舎乃門(カド)をもろとりに立なりて。へぐてなくかたらひ

友なまば。なつかしくて。こしらのおがたりかたらひつて。等
より此家の枕乃ことをも云出て。まづいぼくの聖山に
うたひそめ侍らんといへど。うちうちひて。何やしうおくる
おしき浮旅のそぎうも侍るに。志り行さに定まらぬ
こ何りきならんなれば。まづ神のまづしたにおりむりを思へ。
きらばとくあへなて。戸ぐり帳のちりをどうなどいふほど。
日くれぬ
十八日。日のくしきなれまり。大槻氏にやどりたれば。つと

ゑさくその家より壽信をとりあひて出さつ。従者（ズサ）ふたり
なり。多豆伎にちぎらしまくに。玉造のうたにむかふ町を
そのまさらに。菜のふめもそろうに咲こちてこかし
こにむかをあせる。里乃林の梅母あざれ。其をこぶひ入る色
えさいそれぞう幾ろうこちも。
むのくと霧も雲まさつか枝うれ出る旅のとけさ。
若江より出るこゝに木村重成ぬしの墓あり。
松さそる鄙べの木むらの蔭とひて沙るゝさをに芳をぞ思ふ。

心のうちは色向草なりつゝ捨むもあはしくて。かい若
ましつそのうち人にいと大なる碑（イシブミ）ありく。これも元和の役（エヤキ）に
うち死きし人のなるしはあまどそれさまは目をもつけもて。
中西がり行むまいまぐ日も高しいさうよぎるかこなりかく
るついでもまさありがさうるべしとて。誉田の家にまうづ。大和
川をわたれば。やがてその所あり。若江より南三里ばかりもや
あるべき。應神のみかどのミそろ所まして。諸陵式に。惠我藻伏
山陵と見えたる。これなるを。欽明の御代に。陵の前に立て

らましよし。縁起にはんや。是に道明寺といふ尼寺あり。その
院内に天満天神。天穂日命の社ありしまゝ。このこゝろ。
すべて土師（ハジ）の里といふよしなまゝ。菱原氏にゆかりある和
にこそ。日くるゝほどにきり川につきぬ。多豆伎いこうよろ
こびて。ゆるしねんごろまゐ。紀の国人宮須富雄。なまいの
九里某の子などみなおのまゝにをんとて来つどひたれば。
是のつゝまもうすれて。夜もがらうたしふ。
十九日。ゆしたのほどくりて。夜もしうちそこぐ。多豆伎

あまをかとにくらがり坪はさうしきまゝなまゝ。夜ふかいうぞ
りこえぬふべきなど。なつかしうひて。
　ゆくれながれを思ふどこし人をぬまてもとめよけの筈。
とあんよみる。その志のふかさにそこの結ひ緒もいつと
なくうちとけて。さもしつべくくろろぐ。来給はこの近
きなりなる往生院といふ寺に楠正行ぬしの碑（イシフミ）さてる
よし時て見にまかりぬ。きのふしまのうへのをのへ行
とぞ。四条といふ地（トコロ）の名。今は讃良（サヽラ）郡に属（ツキ）されど。交野より

これにむかしはすべて四条といひさうたんと抱がしくて圖
帳のうち所々にその名見え侍る。されどいと廣き名
なるゆゑに戦場はいづことも今つぐらまは知らせ侍
らぬと多豆役ふ已乃時ぞうに高倍うへりぬ折しも
遠き鉄されば かくてもきりを申しく舊さんもあぢ
きなしとてしひて出さち枚岡にまうてそうりより
大和に入る万葉に直越（タヽコエノ）乃此徑（コノミチ）にしてとよ見る坂こまを也
たうげ道しと抱がゆる比おもしおどろくしうありて夜

まはうに澤来ぬとしこなる所なれば やどらんかり屋も
行し風さへいとじくて からうさもふようなまじぬまこか
ぐら小瀬村まぐこえ来て 乃のほとりなる家に入る
油志がりなどするかどにはまぬてとり成美のうこいそ
ゆる秋篠の里なりいこ及山はなか是さるに西行の言
のを思ひ出らきて秋のさびなりましうばぬまさるたも
ともいうにそえたりまし と抱がゆるもあやし幾すき
心なりけり 高倍うよめるか

松乃風成ふしむだろう淋しくて居をよ江なる秋しの里。
室の木坂をくだれば。菱原の伏見なり。古今集ふいざこゝに
こゞ世いへあん菱原や帝しこの里のあれまくもをし。と
よみるは。今のこゝ毎に清く里始らまし比。古今ふのこゝとゞ波
まるものゝ所あるべし。人はこゝ今めきをるゝに浪ひくう
つり釣んと時めく中ふひとりさもゆさゞめぼく。あれこゝに
こゞ世いへあんと思ひこゝゆくへるんぞくいと訪れなりと一そのこ
をたどりゆくるふ清あてもげようこ枕はもべこゝその

なりけり。とぞ抑りふまこ後撰集ふすが原やかしこの
ら絶ゝ見ゝこせば。霧ありまがふをもつその山とよみるかは。
雨のさ夜ふよくうあひくその山をるうふ辰巳のうゝふ見
ゝこゝるゝと。雰をるゝ姉しこのくまれ秋風ふ月をみのがる
をもつその山。小泊瀬や霧ふまがふ谷の色をふしみ乃
蓋ふ雅あがむらんすゞいふる鶴のよこ合せよもがりて。
まことの雨をさゞ降ゝるなしねぞいてくたがへ里伏見とう。
月乃澄のがるを見ん料ふ。春日高原なゞをこそとう

いづべかめまきまくさをさろせいと遠くれば花のえれなが
めらるべきまあらば。おまてらは後の世の人まどりしとる
るべきよみざるまるん。いさゝか行く。左に西大寺。まさ
夏原を神の社あり。右に蓮某山とて。四方に池をあり
めぐらしさる後あり。式り菅原伏見東陵と見えたるが。
即(ヤガテ)これまく。垂仁のこかどの御墓なり。其池のつゝみを
南ざるにそれて。招提寺にまうづ。金堂はしゐ西の大内
裏の八省院のこれるをうつしたるとて。鵄尾(クツガタ)などたぐひ

なさ物也。南門を出て。藥師寺の佛足石を見る。ゑり付
さるさるげに物ありて雅勝なり。日のかげ西に沈めるにお
どろおく。しゐたいそぎ行く。興福寺のうちてかしこ
見めぐり。南家出を出て。勝南院といふ町に大重とあ
賑えへなくてごやのあるに屋どりぬ。こゝは西村某を始め。
しきる人もかれこまあまど猿づかれのくるしさにさるわさ
ゝまもおとづまをば。うちふしぬ。
廿日。日出る比屋どりを出て。猿沢の池のなぎさにしば

したぐもむ。壽信

をりにあへいんまつゆまるなりあらむしにけすむ猿沢の池。
采女の氏なぐとて。衣(キヌ)かあらしよしまて。名りゆふ柳。
ひとまゆたてり。

さほ姫のさぬかけ柳新見えあ池の緑もすそぞ也なり。
とぐろぶ橋をあ坂などいふなるをへ。大佛を見る。二月堂
三月堂などもこれひんがし山に引つゞきまりめぐりくてま
向山の八幡宮をくがして。三笠山の林をすぎ。春日社に

まうづ。こしいに宮柱設め建らるゝよしまて。ゆまとの工(タクミ)ともも。
みな馬帽子袴装くそのまゞつかうまつる。さほがは古
の名をしよといとをふとしさてしまてりいづくなりむか
ちん。吉野の花をまゞさやうなん。月の瀬といふなり。
梅おほうるよしなり。春のおそなは山ぶとゝ絵なりときけ
ば。猿のこれるもありなん。豊をのこ見るものかいとむし
の人もいひおさゝりいでそなさをたどしんと。林がへまのう
つゝやに立よりくそをとひ。社家の町をすぎ。花をとれ。

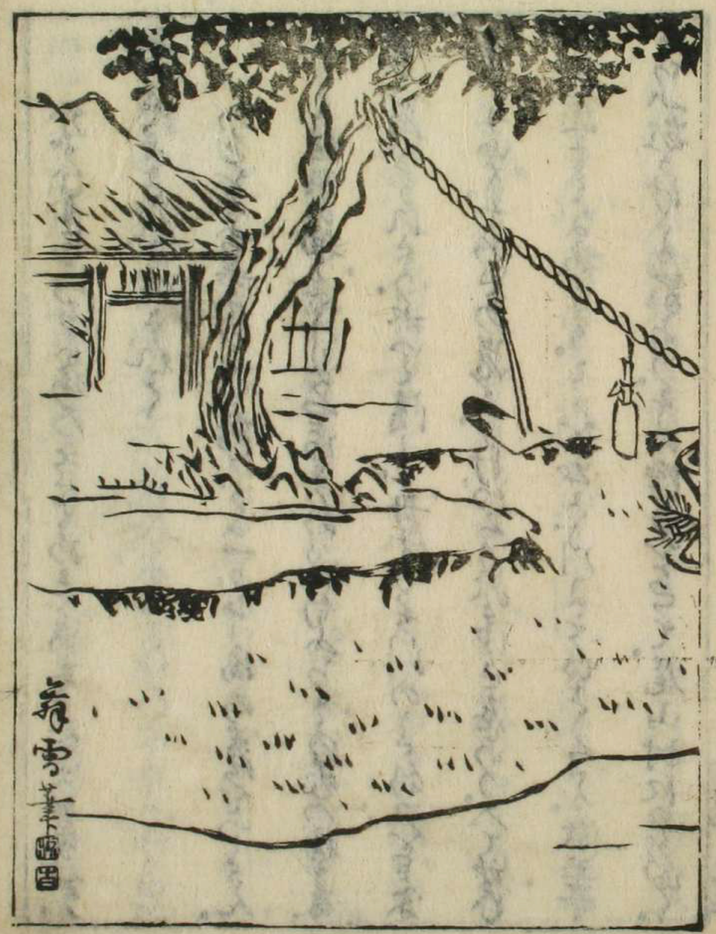
高岡山春日山の名を、谷川の岸つゞひにかけゐる。本ぐら
ものふりて淋し義山里なり。鷲坂石切などいふたゞ茅
をこえ、ふりの里にていこふ。春日より一里なり。背山村
大稲羽むらとすぐ。石切より一里ばかり。里どなまなる
たの田中に小さ紀丘あり。本ゆひしげまり。棒に石のとう
ろ一基たてり。里人にとへば陵（ミサヽキ）なりといふ。即光仁天皇の
御墓にて、式に田原、東陵と載たるこれ也。古の
ことりを抑しなへて、今も田原の名といふとそ。水ゆたらげ

をこれ。棒をこぬま村といふ。ここにまくうまひさうぶ。ゆさ
ゆさて大橋にいこふ。谷川に板橋にてせるにより云。
法ゆゑる村の名なり。そこの川べに何月たある梅今を
さりまて。えならばうちうをまてるに月の俄の花といと
このもしく。足さへうろくなれなこちして。小野のおくが
といふ所まで来ぬ。ここに何ゆき注連縄（シメ）とそれりて
よりたへつらをりを法さふ徑（コミチ）あり。うへはさうしき峯。
下はふりき谷にて。けらぬざにあゆとくるし紀行そば

なるを。砂くづまぶことめぐさきまでも行りて。いと急し。
女などいかれらぬこなるをばうくべからぬ。からうじてそこ
とらせて。北笠置と思まる標（ニルシ）の石さてそるまあり。そ
なさいけこしのぼるうこうまで。そこ廣しこれさへゆけば。
まさ標乃石さてさり。右月の瀬と思うつけさり。大稲羽
より三里あまりなるべし。これよりやがて梅の花の境な
ことなり。
はさきに梅の風乃うそしぬるおぼつるまくや山路ごとん。

月の瀬に入て。窪田氏の魁春洞に屋ぐる。日もまぐこちえん
ぐまづ茶の法立ならさんとて。そこぐ雪の物あづけおきて
出ぬこの家をやくちきまぶ本の志さみちかれこ
こなることたどりつく。くぐりゆく花の盛はまさぐにさる雪
たれど。巌も雪しとも多かひとつとりまし白なれば。花の
師しさ人いと寒く吹まらひて。たゞ雪の中をくることて
ちなんしける。壽信
これのこの風も木のるにまゝあんをちこちなるぬ梅ぬさうに。

小堅のおくがの
里なるしゑ縄
のさま此絵
乃めし年ど
との正月を
うけ改ると
そ



ぬりつべく。新乃さやかにうつまるはまこいたんかたる義
そしきなり。疎影横斜水清淺。と来信が夢ながらかに
うたひ出たる成にしてとりしゆえたり。廿日ばかりの
よひ雪なれど。暗香浮動月黄昏なんすこしつけがた
くわかぬにちまるや。来信

月さし昨とよりけん梅花ゆふ暑まさる色をしるべり。
げまとおく思まるに拘うさほがに山ふところのほそ見れ
そてなびおぼつかなからんとて。屋どうまうへるぬゆふけのあるじ

まどもいとかゆしくて。暑とうるべくもあらぬあれがさなな
徒どみどう静かなる山のいろ。匂ひてなゆかなる花の香を。
後のうちふつまでもとりたれば。ことものはたらべまかしくも
所しさるはいかすなさへあがつきていやしげなるものから。梅
のまわひのふりくしたるが。今宵のさめに没ろしたま
物まやと拘りふまでなつかしく。よろづのほとをもこほられ
てうちふしぬ。
廿一日。あつかに月花の宝ふりくけしいりてるまおどろきて。

ぢうのみなりとおもへ。むかしもろこしの林和靖が西
湖のうちにある山にうゑたんは一本にあまる実の價を
ひとりのよね薪のまうと定めて三百六十株なりしと
うや。さるふることたどり辨ふる者のあるべきあるもあら
ねど。おのづから実とひさ我く。なりひとにぢうのわ
ざとばしりさく。うゑたじめさるがま稱ぶ人おほくなる
もて来つて。かくいふべくはあまるふことを。何れも里人乃
ほりするは実なり。されらがりてあそぶは花なり。ゐ出ん

あがれを人よりおもへて。実のくぼきをこがをきむる。ま
さしくら奪のおとうりにうゑつるとおりふるもをかし。然は
あまでどうの西の湖ハ。ちかく銷金渦ともよぶぢうの縦
さへふ處あるを。この月の漸ハうる源山のうち蔭あれば。
いつまでもうりらぬ淋しさまて。紅の塵の花をがに時は
何しじと抑りふるも。和靖がなきあり。天がけるそこ
をすぎば。あさびまれまりしくやおりりんなど。ゐゆよ
ぶり花なぐさめにいひ出てわらひぬ。柳生より十丁ぢう

つゞれへゆきて。小門流まさり。その門辺を右の山路を
まさく。笠置りのぼる。峯に毘沙門堂あり。厨子の莊
嚴いとうるわし。本堂はさいつとしれるのにくづまさり
とぞ。後醍醐のみかどの。志げしがほど源まさせ給へる
おなるを。みぐりもなく好まり。

みゆませし笠置の峯のつぐらとり山乃けふまぐれぞまぐれる。
あらまさばかり乱まとてふし世あしければ。君臣(キミヤツコ)のうらぐめ
辨ふる人もあらぐりろるに。橋ノ正成ハ。ひとりうまくら山の

何しに吹みせられぞて。この行在にまゐりつかうま
ほり。ときしくのうきをて。後の世までかをらせゆへるは。
いうじともいへば抑ろうれなまならぞやとおもふけ。
そのうえれおもかげめのまへにうつふ心地して。

滝(ハシ)のまにまぢかくめしてみし夏れうらはさしげと見やのうし。

寿信

かさぬ山のうきみゆきの跡とへばとるも雲々きれのしたさ。

建久七年丙辰八月十五日とぶり付たる鐘あり。ふちにはは

のいりて。世にことわるめづらしきものゝ也。南のうへへゆけば。
いたわのうへにほとゝぎす。このおと東より北にめぐれば。
高さ二十間ばかり。横六七間もあらんとおぼゆるいた
をしてり。併のうへにかゝり付たるさまは見ゆまじ。陶山小
見山が教付のときの火りやけたりしゆゑにさぞかな
らしをまりとなん。まことのうへにかゝさ六七間。長
さ三十間ばかりの大巖横をうたる。下に六間の出ばり。
うちに白木の厨子をおそう。何ををさめたるよう知れ

ぬし。庭に元應元年七月と彫(エ)まる塔婆をそう。まこ
東にをれて。高さ六七間。横十間もあらむ。とおぼし或
巖の併高まるがあり。をべてくいとおほきなるいたほども
屏風をたてたらんが如く。ほうなりて。いましへゆづいた
むらといひたんいかるにはよそとみるめもおそろし
くて。足とく行ふんと手れど。あるは岩といたとのせま
まる間に身をちぢめ。あるはいたれの志たに宵をくぐめ
まどするやどに。時うつるぬ。皇居にありしむかしの城(キ)

門(ド)の跡なども。それかあらぬか今にのこりをり。そこにさく
らの花の咲そめたるがこそりゑ給ひ。
　雨あらぬされも紬のぬる武風を秋風や粉さそふん。
みかどの思ひぬ山のりうぢをぞ見るかとよませあひし
時にはあら稀ど。たりものあいごそぞろまとゞめがたくて。
去とし春あきまかげなり。からうじてもとのまゝに
出く。ぬりとにくぐりぬ。門をいでてゝかれこを北笠置こ
あるを南うさぎといふ。物高ふ店などもあれた見ゆるは。

くぐは伊賀の上野にかよふうまや。門は淀にくぐる舟津
あれどれりそり。おくまで豆のうまひたるに。所の者ども。
舟りのりあへ。若がしがねどに木津にさて給ると語む
まどもこゝろの京くまの郡のあと見まわしられば。おちら
よりゆく。さるはこの流まあんいづゝ門なりける。門のそひを
二十丁ばかり下りて。向ひの岸へつける舟あり。こゝより跡中
とれる。このまゝりをこゝの京といふとぞ。田の畔(ふね)。畑のあぜ
などに。角(カド)うるはしくかづりあせる石のさほがに苔むせる

が雲のこゝてり。壽信ゑりこゝるりじを見とゞみたくおや
しむ。立よりてよく見れば。表に例幣使料境目傍
示石也。うらに兼應二癸巳年正月十一日と記せり。伊
勢の例幣使の御料田の標（シルシ）なりけり。孫（ウマコ）といふんだりの
人いざなふ。つきくしうゐ旅の友かれ。行ぶりのうらう
ひ。まゝ。さうくしうりなんといひし人もあるしうど。若
き目なれば。こそかゝるものをも見いでゝりけれ。同しよ
ちひ乃義どちなるんなれ。しらでゐぬべくなんおぼゆる。

ければ。かゝる人をさべりけり。あせ山未申
のうゝふうちゝあるこのゆりとなん恭仁（クニ）の郡の御とうれ
行ると。里人どもいふ。たしかれる侍（ツタ）へもなきよしなまど。さ
りやとうべなりまゝ。むかしこひしきれのさま也。松林と
いふ里をていふ。おくの川べ。田方（ヨモ）のなづめおりしかしてとに
辰巳のうゝ。いひしらぬそしきよし。かゝしりふむかへば。生駒
のゞけたるりふ見る。柞（ハソ）のりもこのこゝろなるべくおりへ
どもみぢの比ならしば。蔭とひぬとてなるのかひかれと

いそぐまゝに。むかしくゐぬ。それより神童子坂をまゆ。
このかりとを小芳師とりいふよりして。勝手こりの社な
ど行り。大平尾にゐる。漏出(ワキテ)明神のりあり。いと物さひ
たり。又六丁ぢり来て。京より奈良にかよふ所に出ぬ。
薮村といふ所也。本津のつゝみをゐてゝ。田中におるれば
小川あり。これや玉川のなゞしきなるべき。ゐたり西北の
竹屋りやどる。
いにしへの人乃玉のむきふまにあまりてぬるゝしたがへのつま。

壽信
何ゝ小田のくろ乃をすゝき根ながらなのりに残る料を此也。
廿二日。朝とく立出て。西風たゞけしれど。志のざつ宇治まで
来て。菓屋りやどる。まゞ已まもなりぬなどなれど。しづ
うにてゝの名所(ナトコロ)見んとてなり。やうく風ふさやゝて志めや
うになまるゝ雲のそしき。おがらいまいくいとりの深し。
うちうほとまゐそふる木のめ畑つむ日ゆりしきうぢ此山也。
法まくなるまゝに。橋の東乃つゝみなる。通園がりゆきとく。

豊臣大閤の木の名なる料にくまをゆひしつるべと見る。
それより興正寺にまうづ門の月へなる山僧もまぐさうね
ば考き人なつかしなど口ぞさふべきよもあらで。いとさうく
し。惠心院。離宮八幡。橋寺などめぐりて。うへさに平等
院にいる。庵どうにかへるとく湯あらしつまどなれ蓋ん
とするそしきよもあらで。何さ無しうち紀日なるけ。
せんをべなくて。ちさやにのぼる。野居に池大雅の園
日渉成趣とかける額。清人陳福泉がかける萬碧樓

といふ額などかけたり。この福泉がのれるが後世後の後
藤碩田がかきたく送まるよし記したり。てゝまて木のめ
ようさせてく。志げしがなど門のおりてを望むいとりのに
ごきなれゆうに。なるに畫(フミ)どりにいひたれど。今はさくら
がうも。結つるうもこゆるのほとのまづ押もしいてあし
何まだ。あらましき波のひぐきさん。押のづからはじうなる
沙代の春の夜にあらく。きてうくも何らざりたうたぐ
宋つゝぶみ乃くぐるを見てぞ。おのくはどれさ世のい

とあるとどりのさうのおもかのうへりううぐいさる。これもお
りへばおなじことなる世の常なきなりと源氏のりの
ぐさりにかかるげりとうちなぐさまへる。
河ぶ本はいざよふ波をながめてもまづなげかるゝ舟のゆくへ哉。
河波は霧の中に聲しく絶えくゆゑべしづかき橋も姿。
廿三日雲なれしう。黄葉に立よりてそこより見をまげ。
一言寺にまうづ。横ゆうくさ紀をあらう。来信は従者
どもねて。碇砌の抽く山にのぼる。おのまは棒にて待ん

とて。そのまゝりなるうり屋に入て憩ふ。午時ばかりに。
来信うへ皇来たり。こゝを出て。山科の里をもとぎて。大
石氏のすめりし給ひづ稱く。竹むらの奥にもけ入る。
しるしの碑（イシフミ）とてり
いとゞこ経路あゆぐれ山科のこはたゞしなきいさをと増金。
しる谷より越て。東山の寺社をめぐりさせ残屋をとゝふ
ひくゝとそうまの比。まつ朱氏の立につきぬ。来信がしぞ
く也。支智町の竹屋町上る家にすめり。

廿四日てけよし。下加茂のもり社後(ウシロ)なる貴名義がもとを
とふらひて。久へさふ上の御霊にまうづ。皆川淇園のか
ける梶原が箙の梅乃絵を見る。竪一ヶ横三ヶ[illegible]の
大なる額なり。宝暦七年五月吉日咸愿としるさう。ゆふ
つけて上田重女がもとに。鴨川の東なる家にまうりぬ。
こぞよりんちそこなひて。うちふせるよしまてふ千ゑひ
きのくるまつきさへいとよはげにおえくとしたるさま。
ものあはれなり。とぞうりうたうひてうへりぬ。

廿五日。河原町なる殿のうちに。林有聲がきゑるをと
ふらふ。いざなされて。壽信と共に。三上越前介がもとに。
大宮の五辻にゆく。姫宮のあづまにくだしをなふ御その
料の御やかしきおるを見んとて也。御るじねんごろにせり
ゆふぐれ小野にまうでぐ。菜種のうんさぎを見る
廿六日。壽信は青木氏の子どもと共に。日枝(ヒニ)にのぼれり。
おのれは鳥丸の出水に。式部少丞岡田爲恭のすめるをとふ
らひて。古本の悉曇音義をかうごのうらにかくるを

見る。そのわうごの中に。仙覺の新平家上巻をうるよ
のせうそこあり。めづらしきものなり。おりふしは今傳ある平
家物語。もつ本のぬきさ異本は。巻の数もおほうるを。
普通のほう巻のうちはやくみなされば。もゆく二様(フタヤウ)ありて。
もつ本すぐと古平家。普通のを新平家と云しまや。皮
さ源平盛衰記が。平家物語よりもふるく。平家はお
ほうこの盛衰記より抜出たるまや。とおぼしき程だ。
ふるくは盛衰記をも。平家といふしゆゑは。新古九わ

うちのわるしまや。あくは硫砂雑物を引て。所々ぬく
ものまぐらにいへる時るそふてけことにより。
廿七日ことわることかし。
廿八日。三条本屋町のあぶさなる屋にて。おのまとめを
ほうちくのるす也。大森東蔭おりさちて事どもとり
まうおふ。兼頼南仲のくんぐく取重ねされど。おまひも
と耳とある言のくもなし。さうとてそのまくにおしとて
んもおさしくて。かさとどめつ

花始開といふことを　吉岡清了

咲しもうまちし法さも忘られてまづ思ふのこうち忘れて

平川保明

時るまてまた終しまもいとてるゝ御うきの花乃其のあさ霧

佐保蒼生雄

春の日は長さと時と糸法をらいとのとうまも咲そめよう

淺野茅村

待ひかさをわすれて也ふ抄るゝ夏りよひう那

咲そめし花を見るまも思ふ計ましし日のうましけりこを

大森東蔭

待ひ日うぐのおど先ぐらぶれば咲しむ我なほまてなる後

大槻壽信

ひりとくもおすへ人なし庭様きのふ乃法あミけさの神ふ

林　有聲

我さしぎのあ前月歌あるくと花のうへまも志しとるうな

近藤芳樹

春日望山といふことを

清了

春のいろ乃あまれの海く見ゆるそかまある山ぬかひまいあつまれ

保明

ゆ今日ぶれあまれあくも見ゆるぶるふれさくらおぶ緑なるに

蒼生雄

さか姫の忍めるかまるのまもみまい山ものとうふあひくまうね

茅村

まつ門と山ながむるふのいろそれく事をまるゆふ月のうげ

東蔭

さ紀旬ふ花の波るふうらくとかまとてうふ舟をうれ山

壽信

そるかれ立とそれとと見れば東山よそうぬうきゆさ事ぶ

有聲

うぶふうひとすぶ汚えし紀も狂事してうぬ小野の炭山

芳樹

ゆそぶふてるゆらぎあく ふ吹うせりは 春のゆふべた

廿九日雨ふる。ひんがし山の花いかでなりぬらん抱ぎつかなしとて。
青木正辰かいざまかまゝに書給。青木の児ふたり。かいつゝ
てゆきぬ。雨にまゝめまゝる匂ひいひしらぬえんなり。花頂の門
外なる糸桜。そふを盛りとうちなびけり。西行庵の花。木
ゐるくて鉢によしさせ給庵にいこひくゝへるゝ
晦日。ひるごろより雨されたり。石見の満蓮社玄麟上人。なまい
まぐくごられたりけるよ。おのまゝ郎にありと申すく。おさんとて
まこのぶられたり。とりあひて東山に拝ふ。

やよひのついたちの日。てけよし。河をうつべよいそきどもれ
二日。そふもてけよし。嵐山のさくら盛にあまりと申て。いざ
まづうしにまゐりて。さて西山の花ある事をとらづ。はく
くごらんとて。潤度じまもとりちくのへ。志のく兎のなどに出さ
つ。青木氏の児さらかからともに。大堰川までとおつりり
来る。丸太町通を安樂寺の天満天神にまうでく。妙
心寺のうちをへ。御室にいこひて花を見る。西門を出
て。廣澤の池乃なとりより小ざ丸にそれ。大覺寺の宮れ

庭湖館に立よる。大沢の池を庭にとりこめて樓（タカトノ）うまへ
ゐつゝ。なぎさのさくらいとよし。この小のうちよ。あこそ此
渺とて。大納言公任卿の。あこそなりまてく。猶此のえくれ。
とよみゐへるなもあるよしなり。清涼寺二尊院なぞにも
けふらあわりれだ。こゝなまうでゝ。嵐山に入る。吉岡清了
ゆつゝ。よべこゝに屋どりとく。曉のむかしといふ。おのくこぎ
ものさぼさうなしゐて咲えじめし。楫を見ることもなく。さ
いへど數ひあさ立ちまうて。もくよりなぬ山のもがこいさ

ぎよ。花のあゞれも。花あまぐてそはえ河まとひうごゝれ
つ。いとゞとのくえもくてしつゞ。無よこゝちなんしろふ。青木正
寛が川水くませて。本の色ゑ。恵くごものとう出などあるじめく。
とうしく

大ゐ川清おあれをうそくめぐこのめとる風雨にゆくなり。
花のさくこ後となる如む大ゐ川井をきのかゞ秋ならぬも。
とうしもさしくごに幾あまどやよことらんといひくつてこぞ
うれあらしもなくていとのどう行る日あり。寄信

中にも名ふおみ西行撰ばいがきしたりこゝに彼上人の
しゐしがねどすまれしなりまて。その像（カタ）をおける唐宮所。
慈圓大僧正もこのこゝろに遁世しあひしとうや。後に
木下長嘯子もかくまゐへるにあり。まべくひんがし山
の時めくわたりといひくことまて。西山のうちにかしまき
市にをくれば。所にまたしたらん人の居しめむまいいと
しづかまてんもすゝぬへきしなのさゐなりいはくらの小
所まく。たゝまの條とりしたまく。てんしま用ゐからう

じて三鈷寺にのぼりぬ。宇津宮頼綱入道のゆゑり
ありしなり。冷泉爲氏卿のあるにこの入道に外祖
父なまじ花の比ぞ。まく昔をとへばやまゐのむ
のしづくもなゝこなりけるとよみあへるうちづくの
けしらと名おへる木もあり。二町ばかり行ゐ。良峯
寺なり。まゝにも撰おはし。游龍松とて。座にはこゝろ
まる松あり。粟生の光明寺もをさよしなれど。日をこ
ふくれば。たちよりで。たそかれぐらゐ。むかひの神社乃

おなる富永屋といふやどりにつきぬ湯あさし。ゆかけと
うべて非を六人部（ムトヘ）是香。志る人なればとゝのうさんとおりふ
ほどに。ひるのつれのこゝろくなりて。いつしか孫ゆう[illegible]
つまづむかしくうちふしぬ。
三日雨ふる。今ふは上己のせちなまど。旅なればさることも
えきぞ。やとりを出ぬ。まづ神山にのぼりて。雨ふしをなく
おを見る。辰の時ばかりよりはれて。風ふき出さり。長岡
の社乃池れをとりまて。あはちる雨を見る。今ふもまた。様が

つまふのこゝやりをくらさんとうちまゝひつて。山崎路に出て。
観音寺にまうづ。今此は寺号の郷けさるがゆゑし
きふ目とあらくのぼまるなりけり。やゝ高い所にて。み
せこの山く。宇治ふしこゝやうて。おやくられ入江。流川のあが
まなどもひとめに見ることされて。絵にかゝまりしきなが
めかり。堂の法くりざまも。いとゝるわしくて。方丈庫裏を
そじめてかしこふ屋どもあまた建法したり。東照宮
のこゝ中ろもあり。楊門に不許鎗長刀入門内と名まる

石たてゝるは不許葷酒云々とかけるまは世うかつかく。
めづらしその山の尾づたひに寶寺にまうづ。そうしも風
そげしくなりて雪のふるごとくにちるむいとおもしろし。
堂のまへに門の礎にやとおぼしくてたゝぎりにたてたる
石あるにとぞうり屐かけ木の兎裁させたるにひとひら。
くぶつきのうちにちりうりべうを花ながらうちすうなる。
板のうちさへちりうりあんとおちいとをぶくしうな
まぬ。離宮八幡宮にまうづ。えのうしろのうたれ。庇の左み

ぎりれ拾はそへてかうかうしたる人がたの。まのいとながき
をけしいごとるあり。何中くおとこころまてはりんぬものく。
こゝにも花おかし。妙喜庵をとゝふ。何るじおしきに
くぶりのりて蒲菜（ウスコノメ）いぶをり。其后左関の拾ひおひし
おとてあれそのなぞりとくまゝるすきやのさゝみなど。
なつかしきいほ也。午の時ばかりに。揚子のまとしを南に
こえ。なぎさの屋にいたふ。この屋にも揚ふ木がかり
ありて。其に咲ほへまど。行されとれ久れば。水うま

やまくいそぎいでぬ。男山にのぼる。まづ澄本坊をとふ
らひ給ふ。書院より。南のかたの野山のそしきをながむ。
惺々翁のおとれしちまて。床ちかへ棚などのあらぬ哉。
いへゝ更なり。松花堂いそこなはれたりとて見せざる
ハこゝかこの友。岡田氏より。御文のうち。くりくあるいあ
りがぐさよし。松本坊の二位のもとにせうそこおつまりし
かど。ひたすけたん振まがたまて。さるわたりに這出んも。
けしさなきてうちはしまじ。かなたまいおとづれをもとで。

そこで何となきぬかゝる人のゆうにもてなして。あの坊より
いりたりしかば。見をぬもてとわりなりたり。御宮にまうづ。
ぬかづきをるもかしこきまでうるはしくたふときこゝぢ
がれの内なり。後久我のおほき大臣（オトヾ）の八幡山さりゆく
岩にこえたそく君をぞいのる所のうましさよとよみ
あへるは。位人臣の極をきはめたくこゝづからこえたそくと
うけたりあひたる。けに一身の御うましさぞりやとお
しはかるくわからいさか。私をさはりして。公を後り

ましめらまさるおなるゆゑに禁野といへる也されば京
極黄門のうり人のうち紫のこゆまおもひ花のあるに
あそんとやもるいそぎさつりあるのこかり雪のしかと
師のこのくそのおけがのとよみあへるぬくもべてこゝの
鷲鳥はみなおかゆけのなり物のこめなりけり此こゝや
左中將公經朝臣の物ゐらしかこ紫の表紫をうしお
てこの門をの月を見るかれとよこあへるうこ新古今
まは四句淀の門をのとあり それおもひに天の門はなし

よりあさくなくて門淵などいふぞうりの勢ひある流
なら孫が実系にそむくりとてなるべし伊勢物語なり
物して天の門にいるとあるにお文をこたがによめる
まはたがへるゆうなまでげに淀の門せとあらんうこ
けしきありくおもしろし歌かうりまは天の門をに
ふらせられとおこひこゝをきこく門原をうこり水を
ながめよくうんがみるにあれ新古今ぞしるべとこれ
もこうこ桃のとく也なり牧方の健屋にやどるこの家

らぞおりしろきけし義也。

まさや見んと昔の人のながめせしかたがたやいづこ其ぬおけがの辰の時に出さちぬ。二里ばかりつゝみ侍ひを来て。庭井にいふ。そふ風もおだやかにて。てけいとのどかなり。

風ぬるき浜の法ゝの法し柳めもえるに社うち事あきれ。佐田の社にまうで。森口にてひるけさうべて。未の時ばかりより網島まで来ぬ。さくらの文。梅の口の法ゝ。そふを見せとて。なるに人。おやをかぎり。綿をさち。花見に出さるか。

くがるも。川にも阿まるまで。みちさり。おのまいいづこもおなじ旅なまで。お信はさんがにことなる賑ひを見て。おいうに家やこひしくなりぬらん。おのづから足とげに見ゆるまさそそまつて。阿さら木蔭にさちもえとまりぞ。申の時ばかりに。大槻氏の真沙庵にかへるまぬ。

十日。てけいとのどかなり。緒方章。いゝ見んに法ゝられ文に岡氏のうくまがにまかりさりと呼て。ゆふつけくあとおひぬ章いさうよろこびくそふこゝまて。

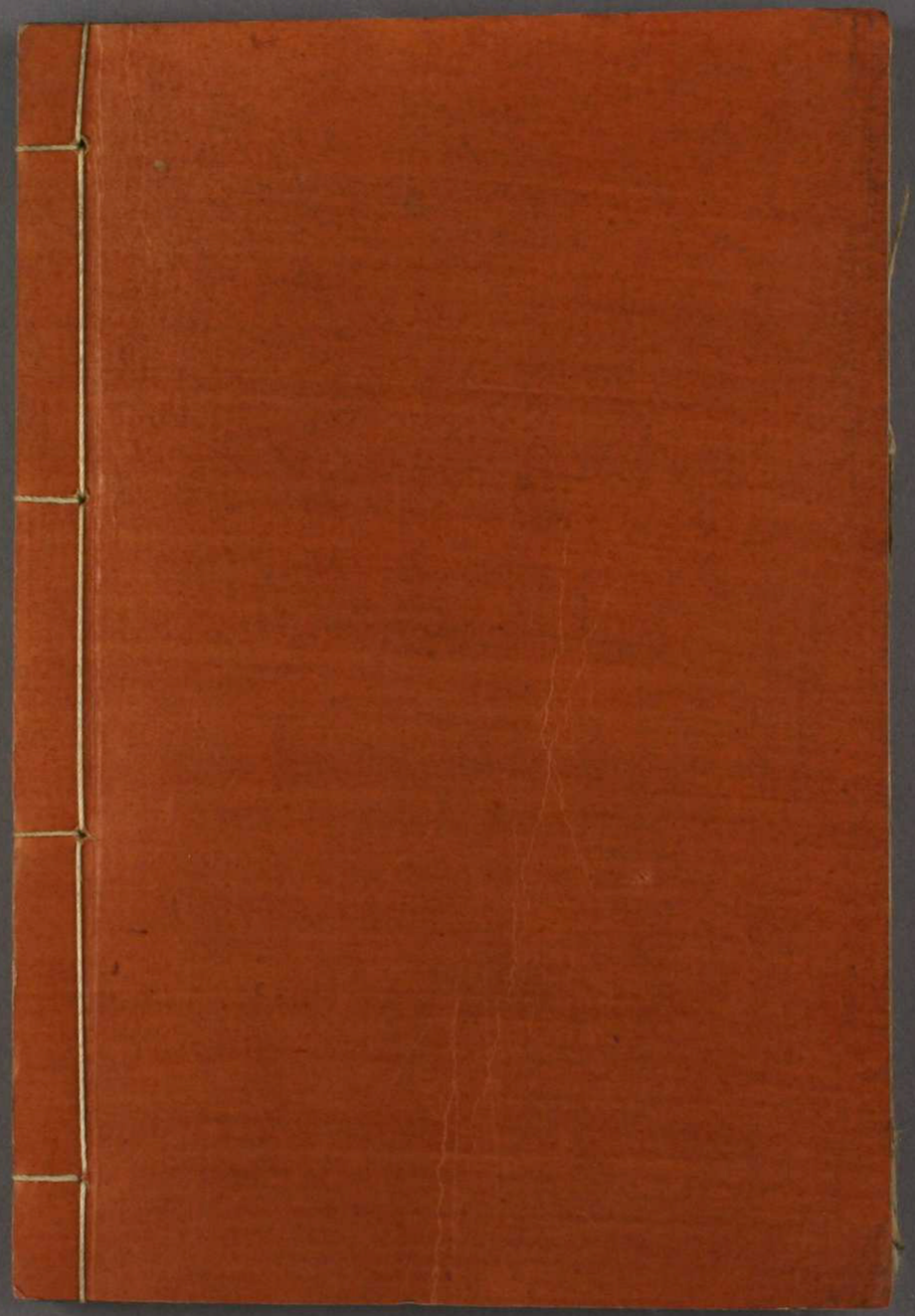
風にちる夜がきに茶のむとひらをおのが友かとてふのむつる
とれんよみ侍りし　こゝふぶりこの家は松杉しげまる本
ごちのおくまで法　そのうちのらうがりしさもいとゝろうに
たゞゝまるやどな　なぞつまづくなるまゝにうくおもへるか
なるべし　宝とうかくくれたてゝおがろよくもれる月の
くし義いとえんなり　夜もうひの本のるいとゞひるふかれ
つゝて物志づかなまゝにふたりつゝこのうへを行かへるさ
まよひ法く章

法くむに枝かはせりと見ゆるが白ふこの月の月のうちかれ
月かげのおぼろならばは中くにちるふかむもまづ白うしま
とはとくよくこ出まはおくれぬるはねさくれど
新かまむ月にみぐ程くちる花もながめにかるあれば夜ぶ
花のちる聲づうしてかまし　き市を法さらの本がくれのやど
夜ふけく夜になるしかばかへらんもうびしくて章と共に
茶の書志見るふまゝ　引かづきてうち寄しぬられなんま
としの花見れとぢ先なり計るか

文えりけるこまはなかとしれやうひの

十日ばかりあるいのうりの屋どうして志るし手

芳樹

浪速　堯韭亭藏梓

4年 6月